

しんぱん
新版
しどうようもんしゆう
指導要文集

だいいっしよう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

ごほんぶつ

御本仏の境界

きようがい

・確信

かくしん

にほんこく
日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。
知もの
にちれんいちにん

005 開目抄 (上・下)
かいもくしやう じやう

ごほんぶつ きやうがい かくしん
御本仏の境涯・確信 70 ページー4 行

さくさくけんひんずい

ひんずい

とううんぬん

にちれん

「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、

ほけきょう

たびたび

流

さくさく

にじ

法華經のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかん

にじ

てんだい

でんぎょう

読

たま

がせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。い

よにん

まつぼう

はじ

証

くふあくせ

なか

わんや余人をや。末法の始めのしるし「恐怖悪世の中」の

きんげん

合

にちれんいちにん

読

金言のあうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

かいもくしやう

じやう

005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信73ページー8行

きようもん

わ

みふごう

ごかんき

被

よろこ

経文に我が身符合せり。

御勘気をかぼれば、いよいよ悦

増

びをますべし。

005

開目抄

(上・下)

かひもくしやう

じやう

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信74ページー2行

ばんなん 捨
万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん。
どうしん もの 記 留

005 開目抄 (上・下)
かいもくしやう じやう

ごほんぶつ きやうがい かくしん
御本仏の境涯・確信 94ページー16行

とうせいにほんこく だいいち と もの にちれん いのち
当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は

ほけきょう な こうだい とど
法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。

かいもくしょう じょう
005 開目抄（上・下）

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信 101ページ（7行）

いま じだい にほん くに と にちれん いのち
今の時代、日本の国でもっとも富めるものは日蓮です。命は

ほけきょう ささ な みらい のこ
法華経に捧げ、名を未来に残していくのです。

にちれん

もの

こぞのとしくがつじゅうににちねうしとき

くび刎

日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられ

こんぱく

さどのくに

かえ

とし

にがつ

ぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、

せつちゆう

記

うえん

でし

送

雪中にしるして有縁の弟子へおくれれば、おそろしくてお

見 ひと

怖

そろしからず。みんないかにおじぬらん。

かひもくしよう

じよう

(005 開目抄 (上・下))

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 102 ページー8 行)

にちれん

きよねん

ぶんえいはちねん

くがつじゅうににちねうし

とき

日蓮というものは去年 (文永八年) の九月十二日子丑の時

やはん

ほんぶ

にくしん

たつ

くち

(夜半) にくびをはねられました。(すなわち凡夫の肉身は竜の口に

た き

くおんがんじよ

じじゅうほうしんによらい

おいて断ち切られ、久遠元初の自受用報身如来とあらわれたので

さど くに るざい

よくねん になつ ゆきぶか きせつ

す)。そして佐渡の国へ流罪されて、翌年の二月、雪深い季節にこの

しよ かいもくしよう したた えん だし おく じよ

書（「開目抄」）を認めて、縁のある弟子へ送るのです。この書

はい ひと まっぼう しょうほう ひろ お だいなん

を拝する人は、末法に正法を弘めゆくときにならず起こる大難

いちおうおそ みょうほうぐつう けつい なに おそ

を一往恐れるでしょうが、妙法弘通の決意がかたければ何を恐れ

けつしん ひと おそ

ることがありましようか。しかし、その決心のない人はどれほど恐

れることでしょうか。

せん てん 捨 たま しよなん 遭 しんみよう

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を

ご しんし ろくじつこう ぼさつ ぎよう たい こつげん

期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の

ばらもん せ た くおん だいつう もの さん ご

婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の

じん 経 あくちしき あ ぜん つ あく

塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、

ほけきよう 捨 じごく ごう だいがん た

法華経をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。

ひほんこく くらい 譲 ほけきよう かんぎようとう

日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経等について

ごしよう 期 ふ ぼ くび は ねんぶつもう

後生をごせよ、父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの

しゅじゅ だいなんしゅつたい ちしや わ ぎ もち

種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用い

じとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の

ほか だいなん かぜ まえ ちり われにほん

はしら

われにほん がんもく

われにほん たいせん

柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とな

とう 誓 ねが 破

らん等とちかいし願いやぶるべからず。

かいもくしょう じょう

(005 開目抄 (上・下))

ごほんぶつ きょうがい かくしん

御本仏の境涯・確信 114 ページー1 行

しよてんぜんじん かご

ろん

(諸天善神の加護があるかないかを論じてきたが) つまるところ

しよてんぜんじん にちれん みす

みす

諸天善神も日蓮を見捨てるならば見捨てなさい。たとえどのような

なん しんみょう

しょうほうぐつう まいしん

難にあつたとしても、身命をなげうつて正法弘通に邁進するのみ

しやりほつ ろくじつこう なが あいだぼさつぎょう つ

とちゆう

です。舍利弗が六十劫という長い間菩薩行を積みながら、途中

たいてん ばらもん しやりほつ め ほ せ た

で退転したのは、婆羅門が舍利弗の目を欲しいと責められたのに耐え

くおんごひやくじんてんごう

さんぜんじんてんごう

られなかつたためです。また久遠五百塵点劫および三千塵点劫の

むかし ほけきよう げしゆ う もの さんぜんじんてんごう ごひやくじんてんごう あいだ

昔に法華経の下種を受けた者が三千塵点劫や五百塵点劫の間

あくどう くる じようたい しゆぎようちゆう あくちしき

悪道（苦しみの状態）におちていたのも、修行中に悪知識

ぶつどうしゆぎよう

たいてん

よ

（仏道修行を妨げる者のこと）にあつて退転したからです。善き

わる

ほけきよう す

じごく

お

こうい

につけ悪いことにつけ法華経を捨てることは地獄に墮ちる行為です。

いま いっしょうじようぶつ しょうほうるふ だいがん た ほけきよう す

今こそ一生成仏、正法流布の大願を立てましょう。法華経を捨

かんぎようとう ねんぶつ しんごう い ごしよう ごくらくじようど ねが

てて観経等の念仏の信仰に入り後生の極楽浄土を願うならば

にほんこく くらいい ゆうわく ねんぶつ とな

日本国の位をゆずろう、との誘惑があつても、また念仏を唱えな

ふぼ くび

きようはく

た

ければ父母の首をはねるとの脅迫があつても、その他のいろいろな

だいなん

ちしや

にちれん

た

ほうもん

やぶ

大難がおこつてきても、知者に日蓮の立てる法門が破られないかぎ

ぜったい た おし

いがい

りは絶対に他の教えにはしたがうことはありません。それ以外の

だいなん かぜ まえ ちり

わたし にほん はしら

大難は風の前の塵のようなものです。私は日本の柱となりましたよ

しゆ とく わたし にほん がんもく

し とく わたし にほん

う（主の徳） 私は日本の眼目となりました（師の徳） 私は日本

たいせん

おや とく とう しゆししん さんとく

の大船となりました（親の徳） 等と、主師親の三徳をもつて

まっぽう

ひと

すく

ちか

ぜったい やぶ

末法のあらゆる人びとを救おうとの誓いは絶対に破ることがないの

です。

にちれん にほんこく しよにん 主 師 親
日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。

005 開目抄 (上・下)

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信 121 ページ 6 行

にちれん にほん ひと しゆ し おや
日蓮は日本のすべての人にとって主であり、師であり、親である

のです。

ほけきよう

弘

もの

にほん

いつさいしゆじよう

ふぼ

法華経をひろむる者は、日本の一切衆生の父母なり。

しょうあんだいしい

かれ

あく

のぞ

すなわ

かれ

章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が

おや

とううんぬん

にちれん

とうてい

ふぼ

ねんぶつしや

親なり」等云々。されば、日蓮は、当帝の父母、念仏者・

ぜんしゆう

しんごんしとう

しはん

しゆくん

禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。

せんじしゆう

(009 撰時抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 173 ページー15行)

かんど

にほん

ちえ

さいのう

しょうにん

たびたび

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありし

にちれん

ほけきよう

方 人

こくど

ごうてき

かども、いまだ日蓮ほど法華経のかとうどとして国土に強敵

おお 設

もの

がんぜん

こと

にちれん

多くもうけたる者なきなり。まず眼前の事をもつて日蓮は

えんぶだいいち

もの

知

閻浮第一の者としるべし。

せんじしやう

(009 撰時抄)

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 199 ページー3 行)

ごんたいじようきよう

だいもく

こうせんるふ

じつたいじようきよう

だいもく

権大乘経の題目の広宣流布するは、実大乘経の題目の

るふ

じよ

こころ

ひと

推

流布せんずる序にあらずや。心あらん人は、これをすい

ごんきようるふ

じつきようるふ

ごんきよう

だいもく

しぬべし。権経流布せば実経流布すべし。権経の題目

るふ

じつきよう だいもく

るふ

きんめい

とうてい

流布せば、実経の題目また流布すべし。欽明より当帝に

ななひやくよねん

聞

み

いたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、

なんみようほうれんげきよう

とな

たにん

勸

われ

とな

南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ、我と唱えたる

ちじん

ひい

ほし 隠

けんおうきた

ぐおう

滅

智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほる

じつきようるふ

ごんきよう

止

ちじんなんみようほうれんげきよう

ぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経

とな

ぐにん

したが

かげ

み

こえ

ひび

と唱えば愚人のこれに随わんこと、影と身と、声と響き

とのごとくならん。

にちれん にほんだいいち ほけきよう ぎようじや

日蓮は日本第一の法華經の行者なること、あえて疑い

うたが

なし。これをもつてすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の

かんど がっし いちえんぶだい

うち内にも、かた肩をならぶる者は有るべからず。

もの あ

(009 撰時抄

せんじしやう

ごほんぶつ きやうがい かくしん御本仏の境涯・確信
199 ページー10 行)

外典げてんに云いわく「未萌みぼうをしるを聖人しょうにんという」。内典ないてんに云いわく

「三世さんぜを知るを聖人しょうにんという」。

余よに三度さんどのこうみようあり。

009 撰時抄せんじししょう

御本ごほん仏ぶつの境涯きょうがい・確信かくしん
204 ページ 5 行

外典げてん（仏教典ぶつぎょうてん以外の書いがい）には「将来しょうらいに起こるべきことを知る人し」

を聖人しょうにんいふとあります。仏教ぶつぎょうの教えでは「過去かこ、現在げんざい、未来みらいの

三世さんぜを知しっている人を聖人しょうにんというとあります。日蓮にちれんには三度さんどの

大功績だいこうせき（三度さんどの予言よげんがすべての中てきちゅうしたこと）があります。

されば、現げんに勝れたるを勝れたりといふことは、慢まににて似
大功德だいくどくとなりけるか。

(009) 撰時抄せんじしやう

御本仏ごほんぶつの境涯きやうがい・確信かくしん
207 ページー11行

とうせいにはほんこく ちじんとう もろもろ ほし
当世日本国の智人等は衆の星のごとし、
と。 日蓮は満月のご
にちれん まんげつ

(
009 撰時抄 せんじししょう)

御本仏の境涯・確信 ごほんぶつ きょうがい かくしん
208 ページ 16 行

なむあみだぶつ ゆう なむだいにちしんごん ゆう かんぜおんぼさつ

南無阿弥陀仏の用も、南無大日真言の用も、観世音菩薩の

ゆう いっさい しよぶつ しよきよう しよぼさつ ゆう みな

用も、一切の諸仏・諸経・諸菩薩の用、皆ごとごとく

みようほうれんげきよう ゆう うしな か きようぎよう みようほうれんげきよう

妙法蓮華経の用に失わる。彼の経々は妙法蓮華経の

ゆう か みな 徒 物 とうじがんぜん

用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。当時眼前の

理 にちれん なんみようほうれんげきよう ひろ なむ

ことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華経と弘むれば、南無

あみだぶつ よう つき 欠 しお 干

阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるがごとく、

あきふゆ くさ 枯 こおり にってん 解

秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるがごとく

見

なりゆくをみよ。

御本仏ごほんぶつの境涯きょうがい
・確信かくしん
257 ページー11行)

てんだいだいしい のち ごひやくさい とお みようどう うるお とう

天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等

うんぬん こうせんる ふ とき さ でんぎようだいしい しょうぞう

云々。広宣流布の時を指すか。伝教大師云わく「正像や

す お まっぼう ちか あ とうんぬん まっぼう

や過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。末法

はじ がんぎよう ことば じだい かほう ろん

の始めを願樂するの言なり。時代をもつて果報を論ずれ

りゆうじゆ てんじん ちようか てんだい でんぎよう すぐ

ば、竜樹・天親に超過し、天台・伝教にも勝るるなり。

(037 顕仏未来記)

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 606 ページー14 行)

わ ことば だいまん に ぶつき たす によらい じつご あらわ
我が言は大慢に似たれども、仏記を扶け如来の実語を顕
さんがためなり。しかりといえども、日本国中に日蓮を
のぞ さ たればと と い ほけきよう ぎようじや
除き去っては誰人を取り出だして法華経の行者となさ
ん。 なんじ にちれん そし ぶつき こもう
汝、日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす。あに
だいあくにん
大悪人にあらずや。

(037) 顕仏未来記 けんぶつみらいき

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
609 ページー14 行

みようほう　ごじ　まつぼうる　ふ　だいびやくほう　じゆせんがい
およそ妙法の五字は末法流布の大白法なり、地涌千界の
だいじ　ふぞく　ゆえ　なんがく　てんだい　でんぎようとう　うち
大士の付嘱なり。この故に、南岳・天台・伝教等は内に
かんが　まつぼう　どうし　ゆず　ぐつう　たま
鑑みて、末法の導師にこれを譲って弘通し給わざりしな
り。

(038

とうたいぎしやう
当体義抄

ごほんぶつ　きやうがい　かくしん
御本仏の境涯・確信
627 ページー7 行)

たとい日蓮にちれん、富楼那ふるなの弁べんを得えて、目連もくれんの通つうを現げんずとも、
勘かんうるがところあ当あたらあずあんあば、誰たれかたれこれたれをたれ信しんぜしんん。

(041 顕立正意抄 けんりつしょういししょう)

御本ごほん仏ぶつの境涯きょうがい・確信かくしん
639 ページー13 行

されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。
むさ さんじん まつぼう ほけきよう ぎようじや
むさ さんじん ほうごう なんみやうほうれんげきよう い
無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。

(095 御義口伝

御本仏の境涯・確信
ごほんぶつ きようがい かくしん
1048 ページー11行

いま にちれんとう たぐ
今、 日蓮等の類い、 南無妙法蓮華経と唱え 奉るは、
だいりようやく ほんしゆ
大良薬の本主なり。

(095 御義口伝

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1053 ページ 4 行)

まつぼう 末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、
だいもく 題目なり。「僧」とは、我ら行者なり。仏とも云われ、
ぼんぷそう ぼんぷそう ぼんぷそう ぼんぷそう
また凡夫僧とも云わるるなり。

(095 御義口伝

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1067 ページー8行)

ほとけ

みち

かなら

しんみよう

捨

こと

仏になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこ

ほとけ

そうろう

推量

すで

きようもん

そ、仏にはなり候らめとおしはからる。既に経文のご

あつく

めり

とうじよう

がりやく

ひんずい

とく「悪口・罵詈」「刀杖・瓦礫」「しばしば擯出せられ

と

目

あ

そうろう

ほけきよう

読

ん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経をよむに

そうろう

しんじん

ごしよう

頼

て候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく

そうろう

し

そうら

かなら

おのおの

助

候。死して候わば、必ず各々をもたすけたてまつるべ

し。

(098) 佐渡御勘気抄

さどごかんきししょう

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1195

ページー11行

ほとけ

みち

いのち

す

仏になる道にはかならず命を捨てるほどのことがあつてははじめ

ほとけ

おも

きようもん と

あつくめり

て仏になれると思われます。すでに経文に説かれている悪口罵詈

わるくち

とうじようがりやく

かたな

つえ

(悪口をいわれ、ののしられること)、刀杖瓦礫(刀、杖、

かわら こいし

なん

さくさくけんひんずい

す

ところ

お

瓦、小石による難)、数数見擯出(しばしば住む所を追われるこ

にど

るざい

とう

なん

ほけきよう

しんどく

と||二度の流罪)等の難にあつてきたことは、まさに法華経を身読

しんじん

ごしよう

おも

したことになる、ますます信心もおこり、後生もたのもしく思わ

し

ひとりひとり

でし

だんな

たす

れます。死んでいったとしても、かならず一人一人の弟子、檀那を助

けてさしあげましょう。

にちれん

もち

日蓮をだに用いぬほどならば、将門・純友・貞任・利仁・

まさかど

すみとも

さだとう

としひと

たむら

しょうぐん

ひやくせんまんにん

かな

田村のようなる将軍、百千万人ありとも叶うべからず。

せいちしょうじだいしゆちゆう

(102) 清澄寺大衆中

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1208

ページー3行

こじま 主

脅

怖

えんまおう

責

わずかの小島のぬしらがおどさんをおじては、閻魔王のせ

ほとけ

おんつかい

名乗

臆

めをばいかんがすべき。仏の御使いとなのりながらおく

むげ

ひとびと

せんは、無下の人々なり

しゅじゅおんふるまいごしよ

(107 種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1227 ページー13行)

こじま

にほん

くに

ぬし

しっけん

とう

わずかばかりの小島である日本の国の主（執権）等がおどすのを

おそ

たいてん

じごく

お

えんまおう

せ

恐れているようでは、退転して地獄に堕ちたときに閻魔王に責めら

ほとけ

おんつか

なの

れたならばいったいどうするのですか。仏の御使いと名乗っておき

いま

おくびよう

ながら、今さら臆病になったとしたら、それはもつともいやしい人

ひと

びとです。

いま にちれん にほんだいいち ほけきよう ぎようじや
今、日蓮は日本第一の法華經の行者なり。その上、身に
いちぶん 過 にほんこく いっさいしゆじよう ほけきよう ぼう
一分のあやまちなし。日本国の一切衆生の法華經を謗じ
むけんだいじよう 墮 助 もう ほうもん
て無間大城におつべきをたすけんがために申す法門な
り。

(107 種々御振舞御書

しゆじゆおんふるまいごしよ

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1230 ページー10行)

こんや くびき

罷

すうねん

あいだねが

「今夜、頸切られへまかるなり。この数年が間願いつる

しやばせかい

雉

とき

ことこれなり。この娑婆世界にして、きじとなりし時は

鷹 擲

鼠

とき

猫

食

たかにつかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらわれき。

妻子

み うしな

だいちみじん

あるいはめこのかたきに身を失いしこと、大地微塵より

おお ほげきよう おん

いちど

うしな

多し。法華経の御ためには一度だも失うことなし。され

にちれん ひんどう

み う

ふぼ

こうよう

こころ

足

ば、日蓮、貧道の身と生まれて、父母の孝養、心にたら

くに おん

ちから

こんど

くび

ほげきよう

たてまつ

ず。国の恩を報ずべき力なし。今度、頸を法華経に奉

くどく

ふぼ

えこう

でしだんな

つて、その功德を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那

とう 省

もつ

等にはぶくべしと申せしこと、これなり」

(107 種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1231 ページ（7行）

こんやくび

き

い

すうねん

あいだねが

今夜首を斬られに行くのです。この数年の間願ってきたことはこ

しやばせかい

きじ

たか

のこ事です。この娑婆世界において雉となつたときは鷹につかまれ、

ねこく

さいし

かたき

ねずみとなつたときは猫に食われてきました。あるいは妻子の敵の

いのち

うしな

だいち

ちり

かず

おお

ために命を失つたことは大地の塵の数よりも多いのです。ところ

ほけきよう

いちど

いのち

が、法華経のためにはただの一度も命をなくしたことはありません

にちれん

まず

そうりよ

み

う

ふぼ

でした。そのために日蓮は貧しい僧侶の身と生まれて、父母への

こうよう

おも

くに

おん

ほう

ちから

こんど

孝養も思うようにできず、国の恩を報ずる力もありません。今度

くび ほけきよう

くどく ふぼ えこう

こそ首を法華經にさしあげて、その功德を父母に回向しましょう。そ

でし だんな わ あた

のあまりは弟子、檀那に分け与えましょうといってきたのはこのこと

です。

にちれんもう

ふ 覚

殿 原

よろこ

日蓮申すよう「不かくのとのばらかな。これほどの悦び

笑

をばわらえかし。

(107) 種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1231 ページー14行

たつ

くちほうなん

だいしようにん

しよけい

おも

なみだ

なが

(竜の口法難の大聖人の処刑のさい、思わず涙を流した

しじようきんご

たい

にちれん

だいしようにん

ふかく

とのがた

四糸金吾に対して) 日蓮 (大聖人) が「不覚な殿方ではない

よろこ

か、これほどの喜びはないのだから笑いなさい」といいました。

いま にちれん まつぼう う みようほうれんげきよう ごじ ひろ

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華經の五字を弘めて

責

ほとけめつど

のちにせんにひやくよねん

あいだ

かかるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、

おそ てんだいちしやだいし

いつさいせけん

あだおお

しん

がた

恐らくは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難

きようもん

ぎよう

たま

ひんずい

し」の經文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」

みようもん

にちれんひとり

いっくいちげ

われ

みな

の明文は、ただ日蓮一人なり。「二句一偈、我は皆ために

じゆき

われ

あのくたらさんみやくさんぼだい

うたが

授記す」は我なり。阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし。

しゆじゆおんふるまいごしよ

(107種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1235 ページー4行

にちれん

にほんこく

うむ

たと

いえ

はしら

日蓮によりて日本国の有無はあるべし。譬えば、宅に柱

保

ひと

たましい

しびと

にちれん

なければたもたず、人に魂なければ死人なり。日蓮は

にほん

ひと

たましい

日本の人の魂なり。

しゅじゅおんふるまいごしよ

(107種々御振舞御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1238 ページー15行)

にちれん

にほんこく

うむ

そんぼう

き

いえ

日蓮によつて日本国の有無(存亡)は決まるのです。たとえば家

はしら

たも

ひと

たましい

しにん

おな

に柱がなければ保たず。人に魂がなければ死人であるのと同じ

どうり

にちれん

にほん

ひと

たましい

道理です。日蓮は日本の人の魂なのです。

にちれん ようじやく もの

日蓮は幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の

ほげきよう ひろ しやかぶつ

おんつか

御使いぞかし。わずかの天照太神・正八幡などと申す

てんしやうだいじん しやうはちまん

もう

くに

は、この国には重けれども、梵釈・日月・四天に対すれ

おも

ぼんしやく

にちがつ

してん

たい

しょうじん

ば小神ぞかし。

(107 種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1239 ページ 9 行

1239

ページ 9 行

あくおう しょうほう やぶ じゃほう そうとう かとうど ちしや
悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を
うしな とき ししおう こころ もの かなら
失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず
ほとけ 成 れい にちれん
仏になるべし。例せば日蓮がごとし。

(122 佐渡御書

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信 1286 ページー1行

わる けんりよくしや ただ ぶつぼう やぶ
悪い権力者が正しい仏法を破ろうとするのに、あやまった

しゆうきよう そう みかた ちしや
宗教の僧たちがその味方をして、智者をなきものにしようとする

ししおう ゆうき しんじん ひと じょうぶつ
ときに、師子王のように勇氣ある信心をもつ人は、かならず成仏

にちれん
することができません。たとえば日蓮のようなものです。

にちれん

かんとう

ごいちもん

とうりよう

にちがつ

ききよう

日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、亀鏡

がんもく

にちれんす

さとき

しちなんかなら

お

なり、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起こるべし

さどごしよ

(122 佐渡御書

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1286 ページ14行)

にちれん

かんとう

ごいちもん

かまくらほうじようばくふ

とうりよう

日蓮は、この関東の御一門（鎌倉北条幕府）の棟梁

しどうしや

にちがつ

かがみ

がんもく

しょうらい

(指導者) であり、日月であり、鏡であり、眼目（将来をあやま

みさだ

ちゆうしん

ひと

にちれん

もち

りなく見定める中心となる人) であります。その日蓮を用いず

るぎい

すさ

ななしゆるい

なん

お

流罪して捨て去ってしまふときには、七種類の難がかならず起こる

でありますよう。

にちれん りんじゆういちぶん うたが
日蓮が臨終一分も疑いなし。頭を刎ねらるるの時は殊
きえつ あ そうろう だいぞく あ だいぞく ほうしゆ か おも
に喜悦有るべく候。大賊に値つて大毒を宝珠に易うと思
うべきか。

123 富木殿御返事 (諸天加護なき所以の事)

ときどのごへんじ しょてんかご ゆえん こと
ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1293 ページ1行

にちれん

りゆうじゆ

てんじんとう

日蓮、またまたかくのごとし。竜樹・天親等すら、なお

たぐ

とううんぬん

こよう

ほつそう

その類いにあらず等云々。これは誇耀にあらず。法相のし

からしむるのみ。

ゆえ

てんだいだいし

にちれん

さ

い

のち

ごひやくさい

とお

故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠

みようどう

うるお

とううんぬん

でんぎようだいし

とうせい

こ

い

く妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云

まつぼう

ちか

あ

とううんぬん

わく「末法はなはだ近きに有り」等云々。

さいわ

わみ

ひんずい

もん

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文

あ

よろこ

よろこ

に当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

ときどのごへんじ

きようもんぶごう

こと

125 土木殿御返事 (経文符合の事)

御本仏の境涯・確信
1298 ページ 17 行

しょうにん もう
聖人と申すは、委細に三世を知るを聖人と云う。
いさい さんぜ し しょうにん い

(133 聖人知三世事

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1314 ページ 6 行

しょうにん
聖人というのは、くわしく過去・現在・未来の三世を知る人を
かこ げんざい みらい さんぜ し ひと

しょうにん
聖人というのは、

にちれん いちえんぶだいいいち しょうにん
日蓮は一閻浮提第一の聖人なり。

（133 聖人知三世事
しょうにんちさんぜじ）

ごほんぶつ きょうがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1315 ページ 4 行

わ で し あお
我が弟子、仰いでこれを見よ。これひとえに、日蓮が尊貴
なるにあらず、法華経の御力の殊勝なるによるなり。身
あ まん おも み くた きよう あなど まったか
を挙げれば慢ずと想い、身を下げば経を蔑る。松高けれ
ふじなが みなもとふか なが とお さいわ たの
ば藤長く、源深ければ流れ遠し。幸いなるかな、楽し
えど きらく う にちれんひとり
いかな。穢土において喜樂を受くるは、ただ日蓮一人なる
のみ。

（しょうにんちさんぜじ）
133 聖人知三世事

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1315 ページ 8 行

にちれん

せけん

にほんだいいち

まず

もの

ぶつぼう

日蓮は、世間には日本第一の貧しき者なれども、にほんだいいち 仏法をも

ろん

いちえんぶだいいいち

と

もの

とき

つて論ずれば一閻浮提第一の富める者なり。これ、時のし

ゆえ

おも

よろこ

み

かんるいお

からしむる故なりと思えば、喜び身にあまり、感涙押さ

がた

きようしゆしやくそん

ごおんほう

たてまつ

がた

え難く、教主釈尊の御恩報じ奉り難し。

しほさつぞうりゆうしよう

(141 四菩薩造立抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1339 ページー15行)

にちれん

せけんてき

にほん

いちばんまず

もの

ぶつぼう

日蓮は世間的にみれば日本で一番貧しい者ですが、仏法のうえか

せかいじゆう

と

もの

らみれば世界中でもつとも富める者なのです。このことはひとえに

まつぼう

とき

う

おも

よろこ

からだ

末法という時に生まれたがためであると思えば、喜びは体じゆう

かんき なみだ おさ

にあふれ、かんき 歡喜のなみだ 涙は押えがたく、おさ どのようにしてきようしゆしやくそん 教主き 釈尊へ

ごおん むく

の御恩に報いていけばいいでしょうか。

いま 被 今、日蓮、法華經一部よみて候。一句一偈になお受記を
にちれん ほけきよういちぶ そうろう いっくいちげ じゆき
かぼれり。いかにいわんや一部をやと、いよいよたのも
し。

(150 転重軽受法門

てんじゆうきようじゆほうもん

御本仏の境涯・確信
ごほんぶつ きようがい かくしん
1357 ページー17行

いま ききよう にほんこく う み かなら ほけきよう
今この亀鏡をもつて日本国を浮かべ見るに、必ず法華経
だいぎようじゃあ すで そし もの だいばちあ
の 大行者有るか。既にこれを誇る者に大罰有り。これを
しん もの なん だいふく な
信ずる者、何ぞ大福無からん。

(162) 曾谷入道許御書

そやにゆうどうどのもとごしよ

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1410 ページー2行

ほけきよう ぎようじや

だいなん

遭

そうろう

悔

法華經の行者としてかかる大難にあい候は、くやしく

思

そうら

しょう

受

し

そうろう

おもい候わず。いかほど生をうけ死にあい候とも、こ

かほう

しょうじ

そうら

さんあくししゆ

そうら

れほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候い

いま

しょうじせつだん

ぶっか

得

み

つらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろ

そうろう

こばしく候。

194

しじようきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事

ぼんのうそくぼだい こと
(煩惱即菩提の事)

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1520 ページ7行

にちれん おき

こんじょう

祈

ほとけ

成

日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏にならんと

思

おもうばかりなり

しじょうきんごどのごへんじ

せおうごしよ

(209) 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1590 ページー14行

にちれん わか

こんぜ

ねが

日蓮は若いときから、今世のことを願ったことはありません。た

ほとけ

おも

ねが

だ仏になろうと思ひ願うだけです。

ほとけ だいなん およ すぐ
仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。

りゆうじゆ てんじん てんだい でんぎよう よ かた なら

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮 にちれん

まつぼう い ほとけ だいもうご ひと たほう じつぼう しょぶつ

末法に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は

だいこもう しょうみよう ほとけ めつごにせんにひやくさんじゅうよねん あいだ

大虚妄の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、

いちえんぶだい うち ほとけ みこと たす ひと にちれんひとり

一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人な

り。

(219) しょうにんごなんじ
聖人御難事

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1619 ページ 5 行

だいしょうにん う なん しゃくそん なん おな
(大聖人の受けてこられた難は) 釈尊がうけた難と同じか、

おお

りゆうじゅぼさつ てんだい

あるいはもつと大きいか、それはしりませんが、竜樹菩薩、天台

だいし でんぎようだいし なん わたし だいしようにん くら

大師、伝教大師がうけた難は私（大聖人）と比べものになりま

にちれん まつぼう う しゃくそん おお

ひと

せん。日蓮が末法に生まれてこなければ、釈尊は大うそつきの人

しんじつ しようめい たほうによらい じつぼう しょぶつ おお

となり、それを真実だと証明した多宝如来や十方の諸仏は、大

ただ しようめい しゃくそん

うそを正しいと証明したことになるってしまいます。釈尊がなくな

にせんにひやくさんじゅうすうねん あいだ せかいじゅう ほとけ い

つてから二千二百三十数年の間に、世界中で、仏の言ったこ

じつせん ほとけ おし ただ しようめい

とをそのとおりに実践して、仏の教えが正しいことを証明し、

たす ひと にちれんひとり

助けた人はただ日蓮一人だけです。

にちれん

にほんこく

かみいちにん

しもばんみん

いた

ひとり

日蓮をば、日本国の上一人より下万民に至るまで一人もな

過

いま

そうろう

くあやまたんとせしかども、今までこうて候ことは、

ひとり

こころ

強

ゆえ

思

一人なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし。

おとごぜんごしやうそく

(242 乙御前御消息

ごほんぶつ

きやうがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1689

ページー17行)

にちれん にほんこく ひとびと ふぼ
日蓮は日本国の人々の父母ぞかし、
しゅくん
主君ぞかし、
みょうし
明師ぞか
し。これを背かんことよ。
そむ

(271) 一谷入道御書
いちのさわのにゆうどうごしよ

ごほんぶつ きようがい
御本仏の境涯・確信
かくしん
1764 ページ 6 行

にちれん にほんこく だいいち ちゆう もの かた 並 ひと
日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をならぶる人は
せんだい こうだい おぼ
先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覚えぬ。

(273 中興入道消息)

なかおきのにゆうどうししょうそく

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1769 ページ16行

こつしよ　このかた　ふぼ　しゆくんとう　ごかんき　こうむ　おんごく　しま
劫初より以来、父母・主君等の御勘気を蒙り、遠国の島
るざい　ひと　われ　よろこ　み　あま　もの
に流罪せらるるの人、我らがごとく悦び身に余りたる者
よもあらし。

(278 最蓮房御返事

さいれんぼうごへんじ

ごほんぶつ　きようがい　かくしん
御本仏の境涯・確信
1784 ページー1行

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。

みようほうれんげきよう

ほんぶつ

おわ

そうら

きよう

い

妙法蓮華經こそ本仏にては御座しまし候え。經に云わ

によらい

ひみつ

じんつう

ちから

じんつう

によらい

ひみつ

く「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」

たい

さんじん

ほんぶつ

じんつう

ちから

ゆう

さんじん

は体の三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にし

しゃくぶつ

ほんぶ

たい

さんじん

ほんぶつ

ほとけ

て迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は

ゆう

さんじん

しゃくぶつ

しゃかぶつ

われ

しゆじよう

用の三身にして迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生

しゆ

し

しん

さんとく

そな

たも

おも

のためには主・師・親の三徳を備え給うと思ひしに、さに

そうら

かえ

ほとけ

さんとく

被

たてまつ

ほんぶ

ては候わず、返つて仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫な

り。

(
280

諸法実相抄
しよほうじつそうしやう

御本仏の境涯
ごほんぶつ きようがい

・ 確信
かくしん

1789

ページー6行

にちれん まつぼう う

じようぎようぼさつ ひろ たも

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところ

みようほう さきだ

弘

作

顕

たも

の妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき

ほんもんじゆりようほん

こぶつ

しゃかぶつ

しゃくもんほうとうほん

ときゆじゆつ

たも

本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給

たほうぶつ

ゆじゆつほん

ときしゆつげん

たも

じゆ

ぼさつとう

つく

う多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作

あらわ たてまつ

よ

ぶんざい

り顕し奉ること、予が分齊にはいみじきことなり。

にちれん

憎

ないしよう

およ

日蓮をこそにくむとも、内証にはいかが及ばん。

しよほうじつそうしよう

(280) 諸法実相抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信

1790

ページー3行

おも 続

そうら

るにん

きえつ

かくのごとく思いつづけて候えば、流人なれども喜悦

計 無

嬉

涙

辛

はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだな

なみだ

ぜんあく

つう

か

せんにん

あらかん

ほとけ

り。涙は善悪に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、仏

おも

出

なみだ

流

のことを思いいでて涙をながし、ながしながら

もんじゆしりぼさつ

みようほうれんげきよう

とな

たま

せんにん

文殊師利菩薩は妙法蓮華経と唱えさせ給えば、千人の

あらかん

なか

あなんそんじや

泣

によぜがもん

阿羅漢の中の阿難尊者は、なきながら「如是我聞（かくの

われき

こた

たも

よ

きゆうひやくきゆうじゆうきゆうにん

ごときを我聞きき」と答え給う。余の九百九十九人

すずり

みず

によぜがもん

うえ

は、なくなみだを硯の水として、また「如是我聞」の上

みようほうれんげきよう

書

付

いま

にちれん

に「妙法蓮華経」とかきつけしなり。今、日蓮もかくの

み

みようほうれんげきよう

ごじしちじ

ひろ

ごとし。かかる身となるも、妙法蓮華經の五字七字を弘

ゆえ

しゃかぶつ

たほうぶつ

みらいにほんこく

いつさいしゆじよう

むる故なり。釈迦仏・多宝仏、未来日本国の一切衆生の

留

置

たも

みようほうれんげきよう

ためにとどめおき給うところの妙法蓮華經なりと、かく

われ

き

ゆえ

のごとく我も聞きし故ぞかし。

げんざい

だいなん

おも

続

涙

みらい

じようぶつ

現在の^{げんざい}大難を^{だいなん}思いつづくるにも^{おも}なみだ、^続未来の成仏を

おも

よろこ

涙

塞

敢

とり

むし

鳴

思つて喜ぶにも^{おも}なみだせきあえず。鳥と虫とは^{とり}なけども

涙

落

にちれん

泣

隙

なみだ^涙おちず。日蓮は^{にちれん}なかねども^泣なみだひまなし。このな

せけん

ほけきよう

ゆえ

みだ世間の^{せけん}ことには^{ほけきよう}あらず。ただひとえに^{ゆえ}法華經の故な

かんろ

い

り。もしし^{かんろ}からば^い甘露の^いなみだとも^い云いつべし。

(280) 諸法実相抄

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1792 ページ 4 行

おも つづ

るざい み

かぎ

よろこ

このように思い続けていると、流罪の身とはいえ限りなく喜ばし

ひと

かな

いことです。人はうれしいことにつけても、悲しいことにつけても

なみだ

なが

なみだ

ぜんあく

つう

涙を流します。涙というものは善悪のどちらにも通ずるもので

ちゆうりやく

にちれん

しやくそん

のち

でし

す。(中略) いま日蓮も、釈尊がなくなつた後に弟子たちが

しやくそん

なみだ

なが

おな

なみだ

釈尊をしのんで涙を流したのと同じく涙しています。このよう

るざい み

ほけきよ

だいもく

ひろ

みようほう

な流罪の身となつたのも法華経の題目を弘めたためです。その妙法

しやくそん

たほうによらい

みらい

にほん

くに

ひと

とど

は釈尊、多宝如来が未来に日本の国のあらゆる人びとのために留

のこ

みょうほうれんげきよう

わたし きようもん

め残してくださったところの妙法蓮華經であると、私も經文ど

き

ほげきよう おし

しゆぎよう

おりに聞いてきたからです。そして、法華經の教えのとおり修行し

けっか

げんさい だいなん

おも

なみだ

てきた結果として、現在の大難にあっていることを思っても涙が

なが

みらい じようぶつ おも

よろこ

なみだ

流れ、未来の成仏を思っても喜びで涙がとめどなくあふれてき

とり むし な

なみだ なが

にちれん な

ます。鳥と虫は鳴きますが、涙は流しません。日蓮は泣きませ

なみだ

なみだ せけんいっばん

が、涙のとどまることはありません。この涙は世間一般のことに

ほげきよう

ぎようじや

じっせん

よるのではなく、ただひとえに法華經の行者として実践するため

なが なみだ

かんろ

さいこう

あじ

なみだ

流す涙です。ですから、それは甘露（最高の味）の涙といえるで

しよう。

すで ほけきよう
既に法華經のために御勘気を蒙れば、ごかんき こうむ 幸いの中の幸い
さいわ
なり。瓦礫をもつて金銀に易うとは、かりやく きんぎん か これなり。

(284 波木井三郎殿御返事

はきいさぶろうどのごへんじ
御本仏の境涯・確信 ごほんぶつ きようがい かくしん
1811 ページ 8 行

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と

とうじよう なん 過 ゆえ しよなん なか いのち 捨

東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつ

ほど だいなん 罵 責

る程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは

ところ 追 むじつ い 付 おもて 打

処をおわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれ

もの 数 しきしん にほう 起

しなどは物のかずならず。されば、色心の二法よりおこり

謗 もの にほんこく なか にちれんいちにん

てそしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

うえのどのごへんじ とうじようなん こと

御本仏の境涯・確信 1888 ページ 6 行

ごほんぶつ きようがい かくしん

にちれん だいなん たつ ぐち ざ

およそ日蓮がうけたさまざまな大難のなかでも、竜の口の座と、

とうじようかげのぶ

こまつばら

ほうなんいじよう

だいなん

東条景信におそわれた小松原の法難以上の大難はありませんでし

おお なん

いのち す

た。そのわけは、多くの難のなかでも、ほかには命を捨てるような

だいなん

わるくち

せ

す

大難はなかったからです。悪口をいって責められ、あるいは住んで

お だ

むじつ つみ

かお う

いるところを追い出され、無実の罪をいいつけられ、あるいは顔を打

しきしん

たれたことなどは、たいしたことではありません。したがって、色心

にほう

ほけきよう じっせん

ひなん

もの

にほんこく

の二法にわたって法華経を実践したために非難された者は、日本国

にちれんひとり

のなかでは日蓮一人だけなのです。

かんじほん はちじゅうまんおくなゆた ぼさつ いくどうおん にじゅうぎよう げ

勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈

にちれんいちにん 読 たれ い にほんこく とうど てんじく

は、日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・天竺、

さんごく ほとけ めつご 読 ひと われ 読

三国にして、仏の滅後によみたる人やある。また我よみ

名乗 ひと おぼ

たりとなのるべき人なし。また、あるべしとも覚えす。

とうじよう くわ とうじよう にじ なか

「および刀杖を加う」の「刀杖」の二字の中に、もし

つえ じ 遭 ひと かつな じ 遭 ひと

「杖」の字にあらう人はあるべし。「刀」の字にあいたる人

聞 ふきようぼさつ じようもく がしやく み つえ

をきかず。不軽菩薩は「杖木・瓦石」と見えたれば、杖

じ 遭 かつな なん 聞 てんたい みようらく でんぎようとう

の字にあいぬ、刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等

とうじよう くわ み 欠

は「刀杖も加えず」と見えたれば、これまたかけたり。

にちれん

とうじよう

にじ

遭

かたな

日蓮は「刀杖」の二字ともにあいぬ。あまつさえ、刀の

なん

さき もう

とうじよう

まつばら

たつ

くち

難は、前に申すがごとく、東条の松原と竜の口となり。

いちど

遭 ひと

にちれん

にど

つえ

なん

一度もあう人なきなり。日蓮は二度あいぬ。杖の難には、

少 輔 房

面

打

だいご

まき

すでにしようぼうにつらをうたれしかども、第五の巻をも

打

打

つえ

だいご

まき

打

い

きようもん

つてうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云う経文も

ご まき

ふしぎ

みらいき

きようもん

五の巻、不思議なる未来記の経文なり。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

ごほんぶつ

きようがい

かくしん

御本仏の境涯・確信 1890 ページ 11 行

にちれん ぶっか 得

日蓮、仏果をえんに、いかでかしようぼうが恩をすつべき

少 輔 房 おん 捨

ほけきよう ごおん つえ

や。いかにいわんや、法華経の御恩の杖をや。かくのごと

おも 続 そうら

く思いつづけ候えば、感涙おさえがたし。

かんるい 押

うえのどのごへんじ とうじようなん こと

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

ごほんぶつ きようがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1891 ページ 11 行

そ だいじ ほうもん もう べち そうら とき あ
夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たつて、
わ くに だいじ すこ かんが 違
我がため国のため大事なることを少しも勘えたがえざる
ちしや そうろう ほとけ もう かこ
が、智者にては候なり。仏のいみじきと申すは、過去
じかんが みらい 知 さんぜ し す そうろう
を 勘え、未来をしり、三世を知ろしめすに過ぎて候
おんちえ
御智慧はなし。

（353 蒙古使御書
もうこのつかいごしよ

ごほんぶつ きようがい かくしん
御本仏の境涯・確信
1947 ページー2行

にちれん ほんだいいち 不 当 ほつし

日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華経を信じ

そうろう いちえんぶだいいち しょうにん

候 ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の

じょうど 聞 さだ てんち 知

浄土にきこえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子と

名 乗 たま あつきとう

なのらせ給わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬ

由 もつ 思

よしは申さじとおぼすべし。

361 妙心尼御前御返事 (病之良薬の事)

みょうしんあまごぜんごへんじ びょうしりょうやく こと

ごほんぶつ きょうがい かくしん

御本仏の境涯・確信 1964 ページ 4 行

にちれんいちにん

にほんこく

はじ

とな

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらす

い

けんちようごねん

なつ

頃

いま

にじゅうよねん

こと、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の

あいだ

ちゆうやちようぼ

なんみようほうれんげきよう

とな

間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華經とこれを唱うることは

いちにん

ねんぶつもう

ひと

せんまん

よ

むえん

もの

一人なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。

ねんぶつ

かとうど

うえん

こうき

よ

むえん

もの

念仏の方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声

いっさい

けもの

こえ

うしな

とら

かげ

いぬおそ

にってんひがし

には一切の獣、声を失う。虎の影には犬恐る。日天東

い

ばんせい

ひかり

あとかた

ほけきよう

ところ

に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華經のなき所

みだねんぶつ

なんみようほうれんげきよう

にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華經の

こえしゅつたい

しし

いぬ

にちりん

ほし

ひかり

声出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのご

とし。

譬たとえば、

鷹たかと雉きじとの

等

ひとしからざるがごとし。

379

松野殿後家尼御前御返事
まつのどののごけあまごぜんごへんじ

御本仏の境涯・確信
ごほんぶつ きようがい かくしん

2003

ページー6行